

リトープス

Lithops

ハマミズナ科 / Aizoaceae

石に擬態する「生ける宝石」。脱皮・開花のドラマを毎年楽しめる、世界中で愛されるメセン類の代表格です。

基本データ

成長期

冬型（秋～春生育、夏休眠）

耐寒温度

5°C以上が管理目安

日照

日なた（真夏は遮光・半日陰）

播種適期

秋（9月中旬～10月上旬）

発芽日数

数日～2週間

主原産地

南部アフリカ（ナミビア・南アフリカ・ボツワナ等）

概要・魅力

リトープスは、南部アフリカの岩礫砂漠に自生する小型の多肉植物です。2枚の多肉化した葉がほぼ地面に埋まった状態で生育し、葉の上面だけが露出するという独特の草姿を持ちます。その色・質感・紋様が周囲の礫や石英にそっくりに擬態することから、「生ける石（Living Stones）」または「生ける宝石」と呼ばれて世界中で親しまれています。

分類上はハマミズナ科（Aizoaceae）に属し、Kew POWOで受理されている種数は38種（2024年）です。国内の園芸情報では旧来の「メセン類」「メセンビリュウム科」という呼び方が残っていますが、現在の分類（APG・Kew）ではハマミズナ科に統合されています。自生域はボツワナ・ナミビア・南アフリカを中心とした乾燥～半乾燥の岩礫地で、ガリエブ（オレンジ川周辺）地域に全種の約3分の1が集中しています。

葉の上面（リーフウィンドウ）は半透明で、地中の光合成組織に光を届ける構造になっています。この窓の面積は自生地の日射量と逆相関する——高日射地では窓が小さく、弱光地では大きい——という精巧な適応が、学術研究（Field et al. 2013）で示されています。また各産地の土壌・礫の色に合わせて葉色が独立に進化した収束進化であることも分かっており（Kellner et al. 2011）、品種・系統ごとに紋様・色が大きく異なるコレクション性の高さにもつながっています。

リトープスの主な魅力をまとめると次の通りです。

- 石への擬態フォルム — 他にはない唯一無二の草姿。品種ごとに色・紋様が異なり、並べるだけでコレクションになります。
- 毎年の脱皮ドラマ — 春になると古葉を割って新葉が出る「脱皮」が起こります。この変態的なプロセスは眺めていて飽きません。
- 秋の開花 — 秋に白・黄・オレンジ系のデイジー状の花を咲かせます。花は日中のみ開き、夕方には閉じます。
- 実生の個体変異 — 種から育てると、同じ種でも一株一株に微妙な個性が出るのも楽しみのひとつです。

- コンパクトなサイズ — 株のサイズが非常に小さく、限られたスペースでも多くの品種を育てられます。

代表種として、L. lesliei（レスリー）、L. karasmontana（カラスモンタナ）、L. schwantesii（シュワンテシー）、L. olivacea（オリバケア）などがよく知られています。いずれもRHS Award of Garden Merit（英国王立園芸協会の優秀賞）を受賞した実績ある種です。

置き場所

リトープスは日当たりと風通しのよい場所を好みます。光が不足すると葉が縦に伸びた徒長株になり、本来のどっしりとした地面スレスレのフォルムが崩れてしまいます。置き場所は生育期（秋～春）と休眠期（夏）で切り替えることが大切です。

秋～春（生育期）

日当たり・風通しのよい戸外または窓辺に置き、直射日光が当たる場所を確保しましょう。十分な日照は葉の色・紋様の鮮明さに直結します。日照が弱いと紋様が薄くなり、徒長しやすくなります。

夏（休眠期）

高温多湿を避け、遮光50%程度の明るい半日陰で管理します。夏の強光と高温は葉焼けや株の弱体化を招きます。雨ざらしは厳禁です。夏の雨は休眠中の株に過剰な水分を与え、根腐れの原因になります。室内で管理する場合は、西日の強光も避けてください。

冬（寒冷地）

霜が降りる地域では、室内の明るい窓辺で管理します。5°C以上を維持することが目安です。ただし、乾燥状態を維持できてい

れば、多少の低温にも耐えることが知られています（英語圏の栽培経験では乾燥状態で-4℃まで耐えた記録あり）。日本の多湿な環境では、安全側（5℃以上）で管理するのが確実です。

「湿気＋低温」の組み合わせが最も危険です。冬の水やりを控えて株を乾燥した状態に保つことで、低温への耐性も高まります。

○ 水やり

リトープス栽培でいちばん重要で、かつ失敗しやすいのが水やりのタイミングです。「冬型」という一言では言い表せないほど、時期によって管理が大きく変わります。水を与えすぎると即座に根腐れや脱皮失敗につながるため、年間の管理リズムをしっかり把握することが成功の鍵です。

秋（9～11月）：水やり再開・生育期

夏の休眠から目覚め、株が生育を再開する時期です。気温が30℃を下回り、株が動き始めたら水やりを徐々に再開します。土が完全に乾いてからたっぷりと与えます。秋は開花の時期でもあり、株が最も生き生きとする季節です。夏の断水で弱っている株は、最初は少量ずつ試すと安心です。

冬（12～翌2月）：生育継続・控えめに

生育は続いています。気温が低いと土の乾きが遅くなります。土が完全に乾いて2～3日経ってから、土の約1/3が湿る程度を目安に与えます。気温5℃以下での水やりは避けましょう。低温と湿気の組み合わせが根腐れを招きます。

春（2～5月）：脱皮期・断水

リトープス最大の注意ポイントです。脱皮が始まったら断水、または月1回程度の極少量にとどめます。脱皮中の株は、新葉が古葉から水分と養分を吸収して成長するため、外から水を与えると古葉と新葉の両方が過剰に水分を持ちます。

これが「二重脱皮」と呼ばれる最大の失敗です。古葉が完全に乾ききる前に新葉が余分な水を吸って太りすぎ、株が内側から腐敗・弱体化します。古葉がペラペラに干からびるまで断水を維持してください。

夏（6～9月）：休眠期・基本は断水

夏休眠中は原則断水です。水を与えると休眠が妨げられ、過湿で根腐れが起きやすくなります。ただし、猛暑期に株全体がひどくシワシワに萎れてきた場合のみ、土の表面をわずかに湿らせる程度の少量を与えます。雨ざらしの環境では特に注意が必要です。

リトープスの失敗の大半は「水のやりすぎ」です。迷ったらもう一週間待つくらいの感覚が、ちょうどよい管理につながります。脱皮中の断水だけは絶対に守りましょう。

🔗 用土・植替え

リトープスには排水性を最優先した用土が欠かせません。有機物が多すぎると過湿になりやすく、根腐れのリスクが高まります。「水やり後に土が速やかに乾く」配合を目標にしてください。

用土の配合例

いずれも排水性・通気性を優先した配合です。置き場所の環境に合わせて調整してください。

- **基本配合**：鹿沼土小粒 2 + 赤玉土小粒 2 + ピートモス 2 + 川砂 2 + くん炭 2
- **シンプルな配合**：赤玉土（小粒）4 + 鹿沼土（小粒）3 + バーミキュライト 2 + 真砂土 1
- **より排水性を高めたい場合**：軽石（パミス）9 + サボテン・多肉用培養土 1 程度の極端な無機質配合。英語圏の経験豊富な栽培者に見られる配合です。

鉢の選び方

リトープスの根は意外に長く伸びるため、深鉢（スリット鉢・素焼き鉢など通気性の高いもの）が推奨されます。受け皿に水をためたままにしないことも基本です。

植替えの時期と頻度

10～11月（花後）が最適な植替え時期です。1～3年に1回を目安に行います。脱皮中（春）・夏休眠中の植替えは根を傷める原因になるため避けましょう。

植替えの手順は次の通りです。根鉢から丁寧に抜いて傷んだ根を除去し、**1～2週間ほど陰干し**してから新しい土に植え付けます。植替え後の水やりは1週間後以降に少量から始めます。

肥料

基本的に不要です。生育期（秋～冬）に極薄い液肥を月1回程度与える程度にとどめてください。多肥は徒長・過生育の原因になります。

🌱 発芽のさせ方

リトープスの実生は、冬型のリズムに沿って**秋まき（9月中旬～10月上旬）**が中心です。アガベやパキポディウムの春まきとは逆の季節になるので注意してください。発芽適温は15～25℃で、最高気温が25℃前後に下がる時期が播種の目安です。次の手順で進めましょう。

播種の適期

9月中旬～10月上旬（9月15～30日頃）が多くの国内実生者が推奨するベストタイミングです。8月は高温多湿で発芽後の腐敗リスクが高く、10月中旬以降は気温低下で発芽が遅くなり、冬越し前の苗が不十分になりやすいため、この時期を外さないようにしましょう。

発芽までの手順

1. **用土を準備して殺菌する**：赤玉土細粒と鹿沼土細粒を混ぜた無機質中心の用土を容器に入れ、播種前に熱湯消毒（または電子レンジ加熱）して殺菌します。立ち枯れ（ダンピングオフ）の予防が目的です。市販のサボテン・多肉用土でも代用できます。
2. **前処理（任意）**：多くの国内実生者は前処理なしでそのまま播きます。カビが心配な場合は、殺菌剤（ダコニール等）の希釈液に種子を数時間浸してから播く方法もあります。
3. **播種する（覆土なし）**：湿らせた用土の表面に種子を重ねないように並べます。覆土はしません。リトープスの種子は好光性とされ、土の表面に置くだけで発芽します。
4. **腰水で湿度を保つ**：受け皿に水を張り、腰水（底面給水）で鉢底から水を吸わせませす。土の表面を乾かさないように管理することが大切です。ラップや透明の蓋は通気を確保するため使いません。
5. **置き場所と温度管理**：遮光50%程度の明るい半日陰に置きます。発芽適温は15～25℃（目安は20～25℃）です。温度が低い場合はヒーターマットで20℃前後を維持すると発芽がそろいやすくなります。強い直射は発芽苗が焼けるため避けてください。
6. **発芽を待つ**：適温・適湿を保てれば、古い種子（前年採取・適切に保管）は3～7日、当年産の採りまきは10日以上で発芽が始まります。発芽がそろうまで1～1.5か月かかることもあります。カビた種子は見つけ次第取り除きます。
7. **発芽後～初冬の管理**：発芽した苗は非常に小さく（直径数mm程度）、乾燥に弱いです。11月中旬頃まで腰水を継続し、苗がしっかり立ってきたら腰水をやめて霧吹きや上からの少量灌水に切り替えます。初めての脱皮は播種から約6～8か月後の翌春に起こります。
8. **1年目の冬越し**：幼苗は成株ほど断水に耐えられません。最初の冬は可能な限り暖かく保ち（最低5℃以上）、通常の成株管理より水を少し多めにしながら根を育てていきます。

種から開花まで3～4年かかります。毎年の脱皮と少しずつ育っていく姿を楽しみながら、長く付き合える株を育ててください。英語圏では春まき（3～5月）を推奨する情報もありますが、日本の夏の高温多湿を考えると、秋まきの方が冬型のリズムと整合しており、初心者にはこちらが適しています。

❗ 病虫害・トラブル

リトープスのトラブルは、水やりの誤りに起因するものがほとんどです。置き場所の問題や害虫も起こりますが、水管理を正確に守ることで大半の問題は予防できます。

根腐れ（最重要）

過剰な水やり、特に脱皮中・夏休眠中の水やりで発生します。株が柔らかくぶよぶよし、表面が黄・茶色に変色するのが代表的なサインです。進行すると復活が困難になります。根腐れが疑われる場合は、すぐに鉢から抜いて腐った根を取り除き、新しい乾いた用土に植え替えます。排水性の高い用土と通気の確保が何よりの予防です。

二重脱皮・脱皮不全

脱皮中に水を与えると、古葉が完全に乾燥しきる前に新葉が余分な水分を吸って太りすぎ、古葉が正常に干からびないまま次の脱皮が起きます。これが「二重脱皮」で、株のエネルギーが分散し新葉が小さく弱くなります。古葉がペラペラに干からびるまで断水を維持することで防げます。

徒長

日照不足（特に冬の室内管理）で株が縦に間延びし、本来のどっしりとした姿が崩れます。紋様も薄くなります。秋～春の生育期は十分な日照を確保することが基本です。

害虫

- **ネジラミ（根コナジラミ）**：根に寄生する白い粉状の小虫で、土を抜いてみないと発見が難しいです。植替え時に発見されることが多く、用土洗浄＋殺虫剤（オルトランDX等）で対処します。
- **コナカイガラムシ**：葉の付け根や地際に白い綿状で発生し、吸汁により葉が黄化します。多湿・通風不良で発生しやすく、歯ブラシ等による物理除去や殺虫剤で対処します。
- **ホコリダニ（ハダニ類）**：高温乾燥で発生。葉面に白い傷が入ることで発見されます。殺虫剤で処置します。
- **ナメクジ・ダンゴムシ**：夜間に葉を食害します。夜間の観察と物理的な捕殺、または忌避剤の使用で対処します。

カビ・立ち枯れ（実生苗）

実生苗では立ち枯れ病（ダンピングオフ）が多発します。播種前の用土殺菌、殺菌剤の定期スプレー、カビた種子・苗の即時除去が有効です。成株でも多湿・通風不良で糸状菌の感染が起ることがあります。

日焼け（葉焼け）

夏の高温直射下に置いたままにすると表皮が焼けます。夏休眠中は遮光・半日陰に移しましょう。

リトープスのトラブルの大半は「脱皮中・夏の水やり」「日照不足」「通風不良」が根本原因です。年間の水やりリズムをしっかり守り、置き場所を季節ごとに切り替えることで、大部分の問題は防げます。



リトープスの種子を探す
QRを読み取る / seedstock.jp